

私学の誇り

「早稲田と同志社展—新島襄の弟子たち—」から思いを馳せて

副学長・化学システム創成工学科 教授 塚越 一彦



DoKoネット30号では、『渋沢栄一の「民の力」に思うこと』と題し、執筆させていただいた。今回、青山栄一先生（編集委員長）からのご依頼もあり、僭越ながら、再び筆をとることになった。渋沢と同様に、新島と親交が深かった大隈重信と新島または同志社との繋がりを紹介する内容を含めて、とのご指示を受けた。

大隈と新島、早稲田大学と同志社大学 Web上で調べると、2008年、早稲田大学で『早稲田と同志社展—新島襄の弟子たち—』と表して、早稲田大学125周年記念展示会が開かれていた。大隈と新島との間に深遠な友好関係があったことを改めて認識した。早稲田大学と同志社大学、ともに日本を代表する私立大学であり、東京専門学校（1882年）、同志社英学校（1875年）から、それぞれの歴史を歩み始める。この展示会の資料が機となり、両学の「私学の誇り」に思いを馳せることになった。

1888年、新島は、私立大学同志社の設立を掲げ、広く協力を呼びかけた。同年、大隈は外務大臣としてその官邸にて、新島を支援するための会合を開催する。そこで、大隈は「教育は個人の事業にも非ず、政府の事業にも非ず、国民共同の事業であるから資力のある人は率先してこれを援助せられんことを望む」（文献1）と述べた。大隈は、自ら寄付を行い、基金募集に尽力する。一方、東京専門学校は、明治政府から危険視され、帝国大学総長の監督下におかれるなどの圧迫を受けた時代があった。その頃に、家永豊吉、大西祝、岸本能武太、浮田和民、安部磯雄らのアメリカ留学経験のある優秀な新島の弟子たちが早稲田の教壇に立ち、新しい学風の樹立に貢献した（文献2）。

2022年、大隈没後100年を迎え、『早稲田大×同志社大「トップ対談」』（田中愛治総長と植木朝子学長）が開催された（文献3）。両学の交流は、ほぼ一世紀半に及び、日本における私立大学の歴史の一端となって、現在に続いている。両学は、日本の私学教育において、盟友の関係を保ってきたと言える。

銅像と良心碑 早稲田大学、同志社大学は、人文系、社会系、自然科学系の学部・研究科を有する総合大学であり、それぞれの「私学の誇り」を持って歩んできた。その中であつても学風や運営指針に相違点があることは当然である。一つ象徴的な違いとして、早稲田には主たるキャンパスに大隈侯の銅像がある。同志社には、新島の銅像は一つもなく、主たるキャンパスには「良心碑」（「良心の全身に充滿したる丈夫（ますらお）の起り来らん事を」）が学生を見守っている。是非を問うことではない。ただ同志社に新島の銅像は似合わないと思う。「良心碑」でよかった。「良心碑」に救われている。

「世界的教育者」に思いを馳せる 新島旧邸には、何度か足を運んでいる。また、実家が佐賀県にあることもあって、佐賀市の大隈旧宅（生家）を訪れたこともある。大隈も新島もそれぞれの故郷を離れ、明治の時代に私立大学設立の偉業を成した。新しい時代の使命を背負う二人は、故郷を離れて生きることに、お互いの共通点を見ていたかもしれない。

佐賀市公式HPの「大隈重信旧邸（生家）」では、「世界的政治家として、また早稲田大学の創設者として有名な大隈重信侯」として、大隈が紹介されている（2023年1月5日現在）。ここで「世界的政治家」の言葉に触れたことから、それでは「世界的教育者」、「世界的大学」とは、どういう人物を、またどういう大学を言うのだろうか。さらに、思いを馳せた。ここからは、しばし新島と同志社についての私見を述べる。

新島は、多くの教えを、自ら実行しつつ、言葉として残した。「良心を手腕に運用するの人物を出さん事」、「社員たるものは学生を鄭重に取り扱うべき事」、「諸君よ一人一人は大切なり、一人は大切なり」。渡米から始まる新島の行動となし得た成果、今に受け継がれている教育信条、そしてこれらの言葉には、世界の人々が共鳴する深い真実と普遍性が潜む。私は、新島を、稀有な「世界的教育者」の一人であると思う。

「世界的大学」に思いを馳せる

近年、大学の世界ランキングが注目されている。特に研究成果は、様々な手法で評価されるようになった。研究大学とは学術研究と研究者養成を主たる目的とする大学を指す。今後、研究大学の強化推進事業が進められるなか、世界に伍する大学が選ばれ、作られていく。変動する世界情勢から判断し、至極当然のことなのかもしれない。「世界的大学」は、先の「世界的教育者」とともに、一般に広く使われている言葉ではない。その中で、私が「世界的大学」に抱く言葉のニュアンスは、「研究大学」や「世界に伍する大学」に対する説明とは、微妙に食い違うところがある。私は、「研究大学」や「世界に伍する大学」では、「世界的大学」にはなれないという、偏見かもしれないが、考えを持つ。

ここでも新島の言葉を意識していることを否定できない。「わが校の門をくぐりたるものは、政治家になるもよし、宗教家になるもよし、実業家になるもよし、教育家になるもよし、文学者になるもよし、且つ少々角あるも可、奇骨あるも可、ただかの優柔不断にして安逸を貪り、苟くも姑息の計をなすがごとき軟骨漢には決してならぬこと、これ予の切に望み、ひとえに希うところである」。多様性を疎かにし、また人物育成の志なくしては、「世界的大学」は遠のく。

私は、建学の精神「キリスト教主義」、「自由主義」、「国際主義」、そして全ての根底にある「良心教育」を信念に持つ同志社大学が、その資質を持つような気がしている。資質を開花させるには多くの努力が必要とされることは言うまでもない。新島は勝海舟に「大学の完成には200年かかる」と答えている。同志社が「世界的大学」へと躍進するための時間はまだ残されている。

私学の誇り 新島は、「同志社大学設立の旨意」にて、「政府の手に於て設立したる大学の実に有益なるを疑はず、然れども人民の手に抛って設立する大学の、実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず」と述べている。私見が続く、恐縮だが、21世紀は、早稲田大学、同志社大学が、それぞれの「私学の誇り」を持って活躍する「私立大学の時代」だと思う。自由主義、民主主義、資本主義が、より良いかたちで成熟していけば、私立大学が果たすべき役割は益々大きくなる。そこに、早稲田大学と同志社大学が、私学の盟友として生み出すシナジー効果は、必要不可欠だ。

大隈と新島は、明治の時代に私立大学設立の新風を巻き起こした。21世紀、同志社大学は、早稲田大学とともに、それぞれの「私学の誇り」を持って、真実を問い続けながら、「私立大学の時代」に相応しい清らかで爽やかな風を起こしていく。

追記：理工学部・理工学研究科の学生の皆さん、上述のように21世紀は私立大学が背負う責任と役割が大きくなっていくと、私は思っています。同志社は、2025年に創立150周年を迎え、2075年には創立200年を祝うことになるでしょう。これからの50年は、まさしく皆さんの時代です。「良心の全身に充滿したる丈夫」の活躍が期待されます。理工会は、東城哲朗会長のもと、一致団結して、新島スピリッツで皆さんをしっかり支援します。

Go, go, go in peace. Be strong! Mysterious Hand guide you!

(Jō Niijima)

(文献1) 「大隈重信演説談話集」岩波文庫、岩波書店、2016年3月16日第1刷発行
(文献2) 「早稲田と同志社展—新島襄の弟子たち—」(https://www.waseda.jp/culture/news/2008/02/22/1004/)

(文献3) 「大隈没後100年を迎え、早稲田大×同志社大「トップ対談」」2022年、サンデー毎日3月20日増大号

DoKoネット30号掲載記事は、右のQRコードからご覧いただけます。

https://www.doshisha-rikokai.jp/data/DoKo31_0204.pdf

